

『ろくでなしと不埒な恋を』

著: 榊 花月

ill: 竹中せい

どういう意味なのかと思ったが、鷺巣はそれきり白いスーツの裾(すそ)を翻(ひるがえ)す。サイドベンツだとその時気づいた。入念な役作りだ。

秋風の舞う街並みを、鷺巣は肩をいからせて歩いてゆく。

すれ違う人間が、もれなくびくりと反応し、さりげなく鷺巣を避けるのにもおかまいなしという態度だ。

本物さんが通りすがったらどうする気なんだと考えながら、黙は少し離れてついていく。

仲間だと思われたくないというよりは、辺りを雑(な)ぎ払う、鷺巣の威厳をもう少し鑑賞していたいというような気持ちがあった。

目(め)白(しろ)通(とお)りを高(たか)田(だ)の馬(ば)場(ば)方面へ折れ、鷺巣は迷いのない歩調で進む。

やがて、古ぼけた三階家に辿(たど)りついた。

アパートというふうでもないが、一軒家でもない。外階段だけが後づけなのか、妙に新しい。

その鉄製の段を、鷺巣はカンカンと上がってゆく。

「……ここ、あんたの家？」

ようやく思い当たって訊ねたが、広い背中とはびくりとも動かない。

鷺巣の後に続き、開いたドアを入った。

広い部屋だった。

少なくとも、鷺巣の住まいとして想像していたものよりは。

入ってすぐのところがキッチンになっているが、よくあるようなキッチンスペースとは違い、ダイニング分の面積もじゅうぶんに取られていた。

続くりビングは、ローテーブルと本棚だけの簡素な空間である。液晶テレビにDVDプレイヤー、MDデッキ。AV機器だけが立派だ。棚に入りきらないソフトが、うずたかく積まれている。

その奥に、引き戸がある。たぶんそこが寝室になっているのだろう。引き戸は半分開いていて、敷きっぱなしのマットが見えた。

「俺の家じゃなきゃ、誰の家なんだと訊ねたいね」

あまりに遅れて返ってきたので、一瞬それが自分の投げかけた問いへの答だとは思わなかった。

一拍遅れて、

「ふーん……あんがい近所に住んでたんだな」

こちらも、遅すぎる感想をもらした。

「移動の費用が無駄だからな」

それで、あのホテルを指定したのか。

納得し、あらためて部屋を見回した。テーブルも本棚も安物で、だいたい家財道具じ

たいが少ないとはいえ、きれいに片づいており室内は清潔だ。黙のマンションがそうであるというのとは、また違った意味で。生活感はしっかりあるが、それが貧乏くさや荒みをいっさい感じさせない。

そういえば、鷺巣自身、売れない芸能人から滲(にじ)み出す汚れや卑(いや)しさとは無縁の男だ。クラブや酒場で何度か出くわした、一世を風(ふう)靡(び)した『かつての人気者』のことを思い出す。彼らは間違いなくそうした気負い半分、自虐半分のマイナスオーラをまといつかせていた。一度は脚光を浴びた者特有の、ねじまがったプライドというやつだ。

「でも、けっこういい部屋に住んでんじゃん」

ことさら軽薄な調子で言うと、鷺巣は唇の片側だけをきゅっと上げ、皮肉っぽい笑みを作った。

「なんか呑むか」

「さっき、アイスティ呑んだばっかだから……」

「遠慮しなくていいぞ」

「じゃ、ビール」

「迷いが無いな。未成年のくせに」

「ないならいいよ」

「そうか。じゃあ」

その一言と、次の行動が結びつかない。掴まれた腕から、伝わってくる体温。鷺巣の熱。

黙は目を見開いた。すぐ上に、鷺巣の顔がある。

あらためて、いい顔だと思った。内面の強固さを示す、意志的な目。やや厚ぼったい唇。

その、肉感的な唇の下に小さな黒子(ほくろ)があるのに気づいた。今まで、なんで見過ごしてきたのだろう。発見して、思わず見入っただけだといういいわけを頭に浮かべながら、黙は男らしい顔立ちに一(ひと)刷(はけ)の艶を与えるその特長を見つめた。

だが、暢気にかまえていられる事態ではなかったのだ。

見る間にその顔が近づく。え、と思う間もなく唇になにかぬらぬらとしたものが押しあてられる。

それが、さっきまで凝(ぎょう)視(し)していた鷺巣の唇だと、やっと悟った時には分厚い舌が歯列を割った後だ。

「む……」

瞠(みは)った目の間近に、織(せん)毛(もう)のように細かく震える睫(まつ)毛(げ)がある。男にしては長く、濃い。

「——めろっ」

舌を絡めとられる前に、身をもぎ離れた。黙は床を後ずさる。

「なんだよ、急に！」

驚きというよりは動揺で、声が上がずる。

「ん？ だから、報酬」

そう言った、鷺巣の舌がべろりと濡れた唇を舐めた。

さっき、ほんの束(つか)の間(ま)だがそれが自分の口腔内にあったのだ、と思うと頭の芯がかっと熱くなる。

「ほう、しゅう？」

「成功したら、くれると言ったろう」

「あ？ あれは、だからちゃんと」

内ポケットに手をやった。そうだ、自分は封筒を出しかけていたのだったと思い出す。それを、鷺巣が遮るように歩き出したからついてきた。

「誰が金なんか欲しいって言った？」

「……そりゃ」

たしかに聞いてはいない。

「だけど、俺はあんたのギャラ程度なら渡せるって言っただけで」

「なんならそれ以上とも言ったよな？」

「……」

ただの揚げ足取りじゃないか。そんな言い分があるか。

「……『以上』に、俺の身体が該(がい)当(とう)するって？」

「わざわざ訊くな。それは野(や)暮(ぼ)ってもんだ」

にやりとし、退いた黙の肩をぐっと掴んだ。

「それともなにか、喰われるのは怖い？」

べつの意味でかつとなった。

「誰が！」

思わず喧(けん)嘩(か)腰(こし)に返してしまい、はっとする。

「じゃ、そういうことだ」

言うなり黙を引き寄せると、あっという間に担(かつ)ぎ上げる。

「おいっ、やめろ、俺は宅配便の荷物か」

わめくのを一(いっ)顧(こ)だにせず、片方の手で引き戸を開くと、それこそ荷物みたいに乱暴にマットレスの上に放りだした。

鷺巣がふだん使っているらしいシャンプーと、なにかのフレグランス、それに男の匂いが混ざった香りが鼻を衝(つ)く。

困ったことに、それは決して厭な匂いではない。

スプリングがかすかに黙の身体を弾ませた。それを押さえつけるように、鷺巣がのしかかってくる。

ふたたび唇が塞がれた。さきほどよりは慎重に、だがやはり無造作な動きで歯列を割り、今度はしっかり舌を絡めとる。

本文 p80～86 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>